

■研究チーム④

「木」のある風景の系譜

研究チームの研究課題名

「木」のある風景の系譜—日本における自然観の漢字文化・西洋文化受容—

研究代表者およびチームリーダー

大野 寿子（文学部日本文学文化学科・准教授）

研究分担者名

研究員

千艘 秋男（文学部日本文学文化学科・教授）

石田 仁志（文学部日本文学文化学科・教授）

客員研究員

野呂 香（文学部日本文学文化学科・非常勤講師）

院生研究員

早川 芳枝（文学研究科国文学専攻）

池原 陽斉（文学研究科国文学専攻）

松岡 芳恵（文学研究科国文学専攻）

小泉 京美（文学研究科国文学専攻）

古田 正幸（文学研究科国文学専攻）

研究計画の概要

本研究チーム「木」のある風景の系譜—日本における自然観の漢字文化・西洋文化受容—は、現代日本における既知の事象が、今ある表象および概念を獲得し、「ありふれた」ものになっていくプロセスを検証しつつ、現代日本文学文化を見つめなおすという理念に基づき、特に外国文学文化受容を文献学の立場から学際的に検証した 2009 年度の共同研究「トポスとしての「森」の系譜—日本における自然観とその漢文化・西洋文化受容—」および 2008 年度の共同研究「「魔女」の系譜—日本における漢文化と西洋文化の融合のメカニズム—」の延長線上に位置づけられるものである。

「森」という表象の古代、中世、近世、近現代文学にかけての意味の変遷調査の結果、「森」「林」「森林」など、今となっては意味範囲の重なりも見られるそれぞれの語の通時的検証における以下のような問題点が明らかとなった。すなわち第一に、古典文学においては漢字「森」と和語「もり」とを分けて考えなければならないという点、第二に「もり」と「はやし」には少なくとも平安期までは意味領域にズレがあるという点である。さらに第三番目として、近世文学と近現代文学間には、西洋

文学文化の受容により「森」の意味領域の断絶と再構成が顕著であることが、改めて再確認された。和語「もり」は、古代前期においては神木を中心とした空間を指し示すが、平安期には歌枕となり神社を包括する意味へと変化してゆく。一方、和語「はやし」は、古代前期では複数の樹木が茂る空間、平安期に寺院としての意味合いを帯びるようになり仏教色を強めるに至る。また、漢字「森」は元来、樹木の茂った状態を指し示し、近世においては、上述の「もり」「はやし」の意味領域をも含有した神社仏閣に付随した空間として、および生活空間に隣接した異形のモノたちとの交流の場として、一層の他界性あるいは異界性を帯びてくる。さらに「森」は、明治維新以降は西洋文学文化受容により、散策、思索、男女の出会いと別れの場としても描かれるようになるが、「林」や「森林」もが時として、同一空間の言い換えとしても登場しうるのである。もともとは、いわゆる森を意味するドイツ語“Wald”の翻訳語としての「森」に着目し、その日本文学文化における意味の変遷を考察し、古代、中世、近世、近現代等に分割されている日本文学の諸研究領域を別の角度から（通時的に）見つめなおすことが、本研究の目的でもあった。しかしながら上記の問題点を見過ごすわけはいかず、今年度は「森」という語にとどまることなく、樹木を含むより広い空間概念にも適用可能な「木」のある風景」という総合テーマのもと、昨年度の研究の補遺とさらなる発展を目的とした共同研究を行なうこととした。すなわち日本古典文学においては、昨年度には手が回らなかった「林（はやし）」の意味領域に着目し、明治以降の文学作品においては、昨年度の研究のさらなる発展を目的として、下記の四本の論文執筆に至ったのである。

また本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）受給による共同研究「超域する「異界」—異文化研究・国語教育・エコロジー教育の架け橋として」（2009—2011年度）と研究代表者を同じくし、その研究領域と研究メンバーをも共有する、いわば相補の関係にある共同研究であることを付言しておく。科研費受給の当該研究は、ヨーロッパ（とりわけドイツ）の伝承文学における「森」が、魔女や小人や幽霊の棲む異質で魔的な空間すなわち「異界」として登場することに着目し、その「異界」を、文芸の領域に限らず、洋の東西を問わず、音楽等の芸術の分野からも超域的に研究すべく発足したものである。さらに、本研究所での三年にわたる「魔」「森」「木のある風景」をテーマとした我々の共同研究に通奏低音として常に存在し続ける「異界」という概念を、とりわけ「森」「林」の空間と人間との精神的関連性に着目し再検証することが、2010年度から2011年度にかけての共同研究の目的ともなる。

当該年度の研究活動

研究成果（論文）

- ① 野呂香／早川芳枝／古田正幸：「日本古典文学における〈林〉の変遷—前編—」、(2011年3月、「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第13号、236(1)-213(24)頁)。

要旨：本稿では、日本古代文学における〈はやし〉の変遷を考察した。奈良時代の和歌では、人為的に管理された樹木が繁る身近な日常生活の場所であったが、平安時代の和歌では雲林

院を〈くものはやし〉と詠むことを媒介として仏教的色彩を強め、ある種の非日常の場所となった。一方、奈良時代の散文では最初、身近で日常的な採集の場所であったが、現実から逃れ身を隠す場所の意を持つようになり、『続日本紀』では「山林」の語の登場によって仏教の修行をする場所へと変化する。そして平安時代の仮名散文では、漢籍や仏教の影響から、出家者の住む場所そのものが「山林」と表現され、日常生活の場所とは異なる非日常の場所へと変化した。日本古代文学において〈はやし〉は、奈良時代の身近で日常的な採集の場所としての意味を失い、平安時代に非日常の場所としての意味を改めて得たのである。

- ② 池原陽斉／松岡芳恵：「日本古典文学における〈林〉の変遷—後編—」、(2011年3月、「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第13号、212(25)-189(48)頁)。

要旨：本稿では、日本古典文学のうち、上代文学から王朝文学までを主たる対象とした前編を引きついで、中世文学から近世文学にかけての〈林〉の様相と、類義語〈森〉との関係を取りあつかった。中世文学においては、「はやし」はうたことばとして使用されたり、風景の一部として登場したりするのが主であり、「もり」とのあいだに格別の差異はない例がおおい。ただし、『今昔物語集』のように、作品レベルでは怪異的な「はやし」が登場する例もある。くだって近世文学では、俳諧辞書『類船集』において神社と「もり」、寺と「林」という対比があり、連歌の世界では明白な区別がある。この分化は、読本『雨月物語』でも、当該作品が仏教と関係がふかいことで用例が「はやし」に集中する等、一定の普遍性がある。一方で『南総里見八犬伝』になると、用語においては「はやし」「もり」の差異はみとめられるが、機能面の差異は見いだしがたくなる。中世以来の伏流をうけついで、近代にいたる潮流をみとめることができるだろう。

- ③ 石田仁志／早川芳枝／小泉京美：「日本近現代文学文化における〈森〉の表象—横光利一、ニコライ・バイコフ、中上健次—」、(2011年3月、「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第13号、129-152頁)。

要旨：日本の近現代文学における〈森〉の表象は明治期以降、大きく且つ複雑な変遷をたどるが、1930年代の作品においてはフランスのパリのブローニュの森や満州の厳しい自然環境の中の森といった、それまでの日本文学では描き出してこなかった〈森〉の姿を浮かび上がらせる。そこでは、否応なく時代が要請してくるイデオロギー的な問題への通路を開く形で〈森〉は捉えられていく。横光利一『旅愁』のブローニュの森は男女の性愛的な空間から「日本」へと回帰していく空間へと読みかえられていく。バイコフ『偉大なる王』では人間と対立することで滅亡していく〈森〉の虎の物語を語り、それを日本人文学者たちは「五族協和」「王道楽土」といった政治的な言葉の中に回収しようとしていく。ところが戦後の1970年代以降の中上健次の熊野の森を舞台とする作品群では穢れと救済という背反する両義性を内包した、現世と異界との境界領域として呼び出されている。30年代と70年代、時代状況も文学状況も大きく異なる中で日本の近現代文学における〈森〉の表

象のあり方は非常に大きな振幅のある揺れを見せている。

- ④池原陽斉：「「異界」の意味領域—〈述語〉のゆれをめぐる—」、(2011年3月、「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第13号、188(49)–172(65)頁)。

要旨：本稿で調査対象としたのは、「異界」ということばである。近年、このことばは耳目にふれることがおおく、語彙として社会に定着していると考えていいだろう。その一方で、ほとんどの小型辞典に登録されておらず、大型・中型の辞典でも、用例がなく、説明も一定でないことがおおい。

「現代の流行語」として、伸縮自在な語義があたえられているというのが現況である。異界は「現代の流行語」であるが、類似、ないしはほぼ同等の概念をさすことばはそれ以前から存在し、龍宮、黄泉などをさすことばとして折口信夫が使用した「他界」「異郷」、あるいは近世において遊廓、芝居町等をさす「悪所」などがそれにあたる。異界はこれらのことばをいずれかを、あるいはいくつかを統合した概念をしめすものとして使用されるもので、それだけに定義がさだまらない。そのため、語誌的な調査をおこない、使用例にもとづいてその意味領域の一端をあきらかにした。

ミーティング

- ① 2010年6月6日：上述の科研費受給による共同研究「超越する「異界」—異文化研究・国語教育・エコロジー教育の架け橋として—」(以下、科研共同研究と略記する) 第四回研究会終了後、人間科学総合研究所共同研究チームのみ、論文作成の題目等の話し合いを行った(於東洋大学6号館文学部会議室)。
- ② 2010年9月25日：科研共同研究の第五回研究会終了後、人間科学総合研究所共同研究チームのみ、論文作成の締め切り直前の経過報告会を行った(於東洋大学6号館文学部会議室)。
- ③ 2011年2月17日：科研共同研究の第六回研究会終了後、人間科学総合研究所共同研究チームのみ、執筆論文の校正状況確認と本年度共同研究の反省会を行なった(於東洋大学6号館文学部会議室)。

インターネットを使ったいわゆるネットミーティングを含めれば、ミーティングは上記の限りではない。また、2010年度はシンポジウム等の研究成果公開は行わず、人間科学総合研究所紀要論文の共同作成を主たる目標として調査研究を行った。詳細については、上述の論文を参照していただければ幸いである。(文責：大野寿子)